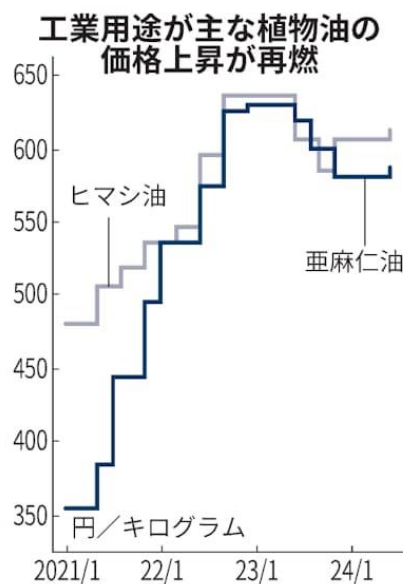




亜麻仁油 1年半ぶり上昇 EU 対ロシア産関税影響

主に塗料など工業用で、近年食用にも使う亜麻仁油の4～6月期の大口価格が1キログラム584～589円と、1～3月期に比べて5～10円（1.3%）値上がりした。上昇に転じるのは2022年10～12月期以来、1年半ぶりだ。



原料である亜麻の種の世界生産の4割を占めるロシア産に対し、欧州連合（EU）の執行機関である欧州委員会が7月から関税を大幅に引き上げる法案で合意したことがきっかけだ。欧州を中心に需給逼迫懸念が強まり、発効前に駆け込み的に調達を進める動きが国際相場を押し上げ、国内卸値にも波及した。亜麻仁油は21年のカナダの大干ばつや、22年のウクライナ危機勃発に伴う供給不安を背景に、22

年末～23年初めにかけて過去最高値となる629円（中心値）まで上昇した。その後は供給懸念の後退や高値に伴う大豆油など代替油脂への需要シフトなどを背景に下落に転じていた。

再び上昇に転じるきっかけとなったのがロシア産に対するEUの関税の大幅引き上げだ。EUは5月末、ロシアとベラルーシ産の穀物や油糧種子、その他の派生製品に対して輸入が事実上困難となる高い関税を課すことで合意した。

新たな関税は 7 月から発効され、油糧種子の場合で価格に対して 50%、穀物の場合で 1 トンあたり 95 ユーロ（102 ドル）が課せられるとしている。

ウクライナへの侵略を続けるロシアの戦費を削減するのが目的だ。欧州委は「ロシアがウクライナ領土で収奪した穀物をロシア産として輸出市場に流通させている証拠がある」としている。事実上の輸入禁止措置を取り、EU 市場に違法な農産物が流入するのを防ぐ目的もある。

EU の決定を受け、市場の需給逼迫観測は急速に強まっている。ロシアは亜麻仁油の原料の亜麻の種の最大生産国で、他の供給国で十分に穴埋めすることができない。

ドイツの油脂を専門とする調査会社オイルワールドによると、23～24 年度の世界生産量 287 万トンのうち、ロシアは 4 割にあたる 110 万トンを生産。2 位のカザフスタン（65 万トン）と 3 位のカナダ（27 万トン）の合計量を上回る。

カザフスタンでは、収穫期後半の豪雪やその後の洪水発生など異常気象の影響で不作となった。カナダでも 23 年以降の価格の下落転換を背景に農家が作付面積を縮小。それぞれ前年に比べて生産量が減っていた。

亜麻仁油の現物取引の指標となるロッテルダムの現物相場は 6 月中旬時点で 1 トン 1375 ドル前後と、前月に比べて 5%程度上昇した。「欧州勢を中心に関税の引き上げ前に駆け込み的に調達しようとする仮需が発生している」（大手卸）との声もある。

EU の関税は域外の国の輸入には直接影響しないほか、日本の原料調達にはカナダ産が中心だ。ただ、一部はベルギーやドイツなど欧州から精製前の半製品である亜麻仁原油も輸入しており、欧州

内で需給が逼迫し価格が高騰すれば影響が及びかねない。国内の食用油メーカー側も今後の調達に警戒感を強め、今期の値上げにつながった。

(浜美佐)

ヒマシ油にも上昇圧力

亜麻仁と同じく工業用途で使うヒマシ油にも上昇圧力がかかっている。4～6 月期は 1 キログラム 605～620 円程度と前期に比べ 5～10 円程度（1.2%）上昇した。上昇は 2 四半期ぶり。

ヒマシ原油の国際指標であるロッテルダム現物相場は参照期間の 1～3 月にかけて、一時 1 トン 1930 ドルと約 1 年ぶりの高水準を付けた。中東情勢の緊迫化に伴うスエズ運河の輸送停滞で、主産地のインドから欧州の港へ向かう海上運賃が押し上げられたことが主因だ。足元では国際相場の上昇は一服したが、為替の円安が輸入コストの低下を妨げている。

日経新聞



2024年 6月 19日 担当 虻川

航空燃料不足、官民で対策検討 経産省や国交省が協議会

経済産業省と国土交通省は 18 日、国内での航空燃料不足への対応を議論する協議会を開いた。一部の空港で海外の航空会社が新規就航や増便する際に航空燃料の供給を受けられない事態が生じている。航空会社や石油元売り大手などが参加し、課題や現状認識を話し合った。

同日の協議会では燃料を運ぶ内航船など輸送の足の確保に課題があるとの認識で一致した。内航船を巡っては 2022 年 4 月に船員の労務管理が強化された。国交省によると、北海道や広島県などから航空燃料の安定供給を求める要望書が届いているという。

日経新聞



2024年 6月 19日 担当 虻川

ENEOS と三菱商事、水素で連携 生産拠点や供給網整備へ

ENEOS と三菱商事は 18 日、水素のサプライチェーン（供給網）の整備について共同検討すると発表した。海外での水素生産拠点の開発や、燃料電池車（FCV）の普及を念頭に置く。水素は燃やしても二酸化炭素（CO₂）を出さない燃料として期待されており、脱炭素化を進める。

再生可能エネルギーを使うことで製造時に CO₂ を排出しない「グリーン水素」の生産拠点を確保する。ENEOS が持つ水素ステーションを活用してトラックや商用車の燃料需要を増やすほか、水素を原料にしてつくる合成燃料の分野でも協力する。

水素の輸送では水素をトルエンと結合させた「メチルシクロヘキサン（MCH）」を使うことを検討する。MCH はガソリンと成分が近く常温でも液体を保つため、既存の石油設備を使える。水素や合成燃料は脱炭素につながる次世代エネルギーとして期待されている。将来の需要増加を見込み、活用方法を開拓するほか供給網を構築する。

ENEOS と三菱商事は 22 年に再生航空燃料（SAF）でも連携している。ENEOS が SAF の生産、三菱商事が原料調達や販売を手がけ、欧州並みにコストを下げることを目指している。



2024年 6月 19日 担当 虻川

原油が続伸、地政学リスクを意識 金も続伸

19日朝方の国内商品先物市場で、原油は続伸して取引を始めた。取引量が多い11月物は1キロリットル7万9410円と前日の清算値に比べ1000円高い水準で寄り付いた。その後一時は7万9540円まで上昇し、取引量が多い限月として5月下旬以来の高値をつけた。ウクライナのドローン（無人機）攻撃で、ロシア南部の港の石油貯蔵タンクに火災が発生したと、ロイター通信が18日報じた。地政学リスクの高まりでロシアの原油輸出に悪影響が出るとの懸念から、国内原油先物に買いが入った。

18日のニューヨーク原油先物相場が上昇し、期近物の7月物が一時1バレル81.67ドルと期近物として4月末以来の高値をつけたことも、国内相場の上昇につながっている。市場では「短期的にNY原油相場が上昇局面にあるので、地政学リスクといった相場上昇につながる材料に投資家が反応しやすい面もある」（国内シンクタンクの主任研究員）との指摘もあった。

金も続伸している。中心限月の2025年4月物は1グラム1万1837円と前日の清算値を37円上回る水準で取引を始めた。18日の米長期金利の低下を背景に、金利がつかない国内金先物の投資妙味を意識した買いが優勢となっている。

白金も続伸している。中心限月の25年4月物は1グラム4965円と前日の清算値を10円上回る水準で寄り付いた。



2024年 6月 19日 担当 虻川

円相場、上昇 米長期金利低下で

19日午前の東京外国為替市場で円相場は上昇した。12時時点は1ドル=157円82~83銭と前日17時時点と比べて31銭の円高・ドル安だった。18日に米長期金利が低下し、日米金利差の縮小を背景に円買い・ドル売りが優勢だった。19日は米国が祝日で全市場が休みとなるため、東京の取引時間帯から様子見姿勢が強まって相場の動きは乏しかった。

18日発表の5月の米小売売上高が前月比0.1%増と市場予想（0.2%増）を下回り、米連邦準備理事会（FRB）の利下げ観測が広がって円買い・ドル売りにつながった。

10時前には一時157円93銭近辺まで上げ幅を縮める場面があった。中値決済に向けては国内輸入企業などによる円売り・ドル買い観測から相場を押し下げる場面もあった。

円は対ユーロでも上昇した。12時時点は1ユーロ=169円48~50銭と、同7銭の円高・ユーロ安だった。ユーロは対ドルでは上昇し、12時時点は1ユーロ=1.0738~39ドルと同0.0016ドルのユーロ高・ドル安だった。